

複数の重要他者はアタッチメントにどのように影響するか —アタッチメント・ネットワークの臨床的利用に向けて—

原口 幸 リー スティーブ ケイ 松葉 百合香 板野 蛍
岩崎 美奈子 井原 成男 早稲田大学

How multiple significant others relate one's attachment?:
For clinical use of attachment network

Miyuki HARAGUCHI, Steve K. LEE, Yurika MATSUBA, Hotaru ITANO,
Minako IWASAKI, and Nario IHARA (*Waseda University*)

For decades, the Attachment Theory proposed by John Bowlby has been one of the mainstream developmental theories covering the lifespan. Researchers of this theory have focused on the relationships between children and their caregivers, although Bowlby also assumed the role of the interaction with peers on in his original theory. This article reviewed the research on attachment relationships in multiple significant others, called "attachment network", to highlight the research issues in this domain. Additionally, the author discussed recent research on attachment network by comparing polytropic models of attachment over the monotropic models according to the traditional view. The review implied that people recognize some significant others including their peers as attachment figures after middle childhood era. In conclusion, it is important to accumulate the domestic research of attachment network and the research for clinical practice.

Key words: attachment, attachment network, polytropic models of attachment, multiple attachment

Waseda Journal of Clinical Psychology
2019, Vol. 19, No. 1, pp. 101 - 108

John Bowlby は、第2次世界大戦後、養育者と離れて施設や病院で暮らす子どもたちの研究と臨床実践の成果を受けて、アタッチメント理論を提唱した。彼の研究が「母性的養育の剥奪 (maternal deprivation)」の提示から始まったこともあってか、アタッチメント理論は、幼少期の子どもと養育者、特に母子関係の理論であると認識されることも多い (遠藤, 2005)。しかし Bowlby (1979) は、「揺りかごから墓場まで」と表現するように、生涯発達理論として考えていた。

アタッチメントとは、原義的に、「危機的状況に接し、あるいは予知し、恐れや不安などのネガティブな情動が喚起されたときに、特定の他者への近接を通して主観的な安全の感覚 (felt security) を回復・維持しようとする傾性 (数井・遠藤, 2005)」のことである。つまりアタッチメントは、単なる情緒的な絆 (affectional bond) や愛情だけでなく、くっつく (attach) ことで自らの情動を立て直したり維持したり

する機能を持っている。アタッチメント対象は、養育者に限られるわけではないものの、乳児期においては養育者が主たるアタッチメント対象であることが多い。

このような、アタッチメント対象との関係の中で形成され、近接の際に用いられるスキーマを、内的ワーキング・モデル (internal working model : IWM) と呼ぶ。その中核は、他者は自分を受け入れてくれるであろう、また自分は受け入れてもらえる価値のある存在であろう、という他者と自己に対する主観的な確信である。さらに Ainsworth, Blenher, Walter & Wall (1978) は、近接の仕方に個人差を見出し、IWM は A 回避型、B 安定型、C アンビバレント型に分かれることが示唆されている。近年では、D 無秩序型を含めて4つのパターンが想定されている。そして、幼少期にアタッチメント対象との間で形成された IWM のパターンが、他の対人関係にも適用されるといわれている

(Bowlby, 1969)。こうした理論的背景をもとに、今日まで、養育者との関係（主に母子関係）がIWMに及ぼす影響や、社会性・認知・情動の発達、精神的健康などとの関連、その後の友人や恋人との関係などについて、多岐に亘る研究が蓄積されている（e.g. Allen & Hauser, 1996; Music, 2011）。

しかし、先行研究のほとんどは幼少期からの養育者との関係に焦点が当てられている。たとえ幼少期であっても、その対人関係は養育者、とりわけ母親に限定されていない。父親や祖父母、きょうだいといった他の家族成員をはじめ、幼稚園・保育所の職員、クラスメイトと、既に人間関係の輪が広がっている。生涯を通して見れば、友人、恋人、教師、同僚など、出会いは多様である。たとえば、集団場面における社会適応に対しては、母子関係よりも家庭外で出会う保育者や教師とのアタッチメントの質がより影響するという報告もある（Howes & Spieker, 2016）。また青年期においては、なかま関係を発展させることがこの時期を生き抜くライフスキルであると示唆する研究（Allen & Tan, 2016）もある。

ところで、半ば無条件にかかわってくれる大人とは違い、なかま関係はどのようにアタッチメント関係に発展するのであろうか。Allen & Tan (2016)によると、ストレスのかかる状況において援助を求めたときに呼応してくれると、アタッチメント対象となりやすい。すなわち、生きていく上で直面するライフイベントは、アタッチメント対象との結びつきを強くするほか、新たなアタッチメント対象と出会う契機であることも推察される。したがって、アタッチメントを検討するにあたって、養育者以外との関係も含めた視点が必要であると考えられる。

実際のところ、Bowlby (1979) 自身も、養育者との関係のみに関心があったわけではない。なかま(peer) との関係も想定し、複数のアタッチメント対象を持つことを視野に入れていた。この複数のアタッチメント対象のことを、個人を取り巻くものであることを踏まえて、アタッチメント・ネットワークと呼ぶ（Doherty & Feeney, 2004）。

しかし、複数のアタッチメント対象を想定した研究が行われるようになってから日は浅く、統一された見解が示されているとはいえない。そこで本稿では、アタッチメント・ネットワーク、あるいは非養育者を含む重要他者をアタッチメント対象とした研究を概観する。その際、アタッチメント・ネットワークをとらえる視点である、モノトロピーとポリトロピーの2つを比較し、整理する。さらに、アタッチメント・ネットワークを検討する現代的な意義を述べた上で、研究課題を明らかにすることを目的とする。

アタッチメント・ネットワークをとらえる視点

現在、アタッチメント・ネットワークは、大きく分けて二つの視点から議論されている（Riggs & Gottlieb, 2009）。

一つは、Bowlby (1969) や Ainsworth et al. (1978) に代表される伝統的な系統である、「モノトロピー」の視点である。この立場では、出生時から原始的なアタッチメント対象（primary attachment figure）が存在しており、そこで形成されるアタッチメント関係の質がIWMを形成し、その後の他者との関係性を左右するとしている。一方、養育者との関係で不安定なアタッチメントが形成されていたとしても、その後のパートナーとの関係によって安定的なアタッチメントに変化する、「獲得安定型（earned security）」の存在も指摘されている。アタッチメントの第一対象が交代することで、IWMの変容が示唆されているが、IWMの変容について統一の見解は得られていない。モノトロピーの視点において、アタッチメント・ネットワークは、「階層的組織化モデル（Figure 1.）」で説明される。原始的なアタッチメント対象との関係において中核のアタッチメント表象が形成され、それを他の人間関係に適用していくことで、ネットワークが階層的に組織化されていくと考えられている（中尾, 2017）。Klohnen, Weller, Luo, & Choe (2005) によれば、①一般他者レベルが特定関係レベル影響するというトップダウンの流れよりも、ボトムアップによる影響の方が大きいこと、②一般他者レベルのアタッチメントが精神的健康に影響を与え、特定関係レベルにおけるアタッチメントはそれに対応する関係の質に影響するとされる。

もう一つは、アタッチメント対象を単一のもの、あるいは階層的なものとはみなさず、複数のアタッチメント対象を同列に扱う「ポリトロピー」の視点である。この視点において、Levitt (2005) により、IWMは生涯を通して変容することが指摘されている。IWMがアタッチメント関係における自己と他者の表象であり、援助要請における相手への期待感である点はBowlbyと同じだが、IWMが複数のアタッチメント対象によって形成されて汎化すると考える点において差異がある。遠藤 (2016) によれば、ポリトロピーの視点におけるアタッチメント・ネットワークについて統一の見解はまだ示されていないのだが、統合的組織化モデルと独立並行的組織化モデルの2つが仮定されている。統合的組織化モデルでは、複数の他者との関係の質が加算・統合される形で子どもの発達が進むとされている。他方、独立並行的組織化モデルでは、複数の他者との関係のそれぞれから個別の発達の要素を子どもが獲得するとされている。

ポリトロピーの視点における代表的な理論として

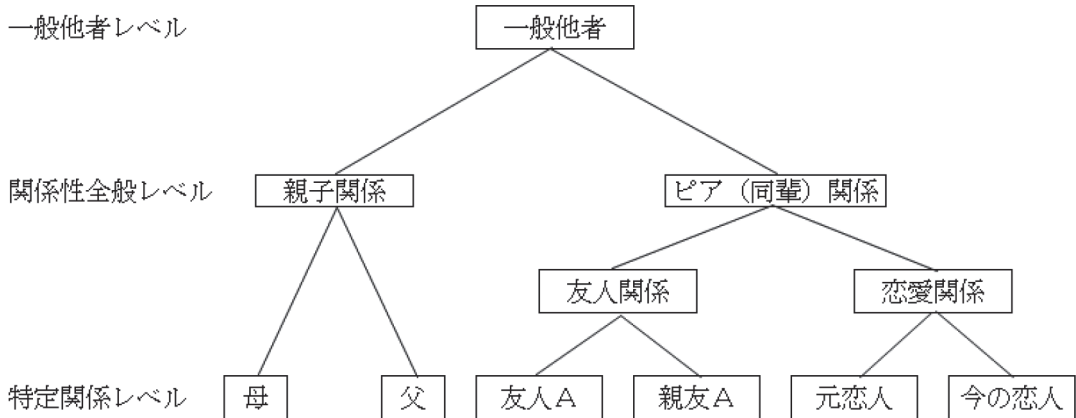


Figure 1 アタッチメント表象の階層的組織モデル (Collins & Read, 1994; Crowell et al., 中尾訳 2017)。

は, Lewis & Takahashi (2005 高橋監訳 2007) が提唱し, 独立並行的組織化モデルに則るソーシャル・ネットワーク理論が挙げられる。Lewis & Takahashi (2005 高橋監訳 2007) によれば, ポリトロピーの視点を持つ研究者は, アタッチメント対象として養育者を重要視しつつも, 初期のアタッチメント関係がその後の他者との関係性に影響するという因果律的な考えを前提としない。その代わり, ①養育者も含めた複数の親密な関係性のネットワークは等しく重要であること, ②ネットワークの成員が生涯を通してあらゆる場面や異なる領域において, 影響を及ぼすこと, ③その成員もライフスパンの中で入れ替わることがいわれている。

アタッチメント・ネットワークにおける2つの視点を紹介したが, 従来のアタッチメント研究では, アタッチメント対象が単一であるという, モノトロピーの視点に立つものが多かった。モノトロピーの課題点として, 養育者, 友人, 教師など様々なタイプの間関係がばらばらに研究されてきたことが挙げられており, ポリトロピーの視点ではこれが補完できることに利点がある (Levitt, 2008)。2つの潮流を概観すると, モノトロピーの視点に比べてポリトロピーでは, ネットワークは流動的であり, 柔軟にその成員を入れ替えたり, またそれに応じて IWM が変容したりすることで, ライフイベントに伴うさまざまな変化に適応していく側面が強調されるのではないかと考える。Bowlby (1969) は, アタッチメントの構想において, 個体が元に戻ろうとする, あるいは維持しようとする生物の傾性であるホメオスタシスになぞらえたところもあった。文脈に応じて異なる IWM を活用したり, また流動的に成員を入れ替えたりすることのポリトロピーの視点も, Bowlby の考えを否定するものではないと考えられる。

アタッチメント・ネットワークの研究動向

ここでは, アタッチメント・ネットワークについて, モノトロピー, ポリトロピーそれぞれの視点の国外における研究動向を紹介する。

モノトロピーの視点である, 階層的組織化モデルに基づいたネットワークの検討はいくつかなされておられ (e.g. Buist, Dekovic, Meeus & van Aken, 2004; Rosenthal & Kobak, 2010), それを測定するための Attachment Network Questionnaire (ANQ) も開発されている (Trink & Bartholomew, 1997)。

たとえば Doherty & Feeney (2004) は, 成人のアタッチメント・ネットワークについて, アタッチメント対象として挙げられる他者の属性, 及びライフイベントがネットワークに及ぼす影響を検討した。アタッチメント対象としては, パートナーが最もよく挙げられ, 次いで, 母親, 父親, きょうだい, 友人, 子どもの順であった。ただし, 複数の対象を挙げてよいことを教示したにもかかわらず, 一人のみ挙げる者が多かった。それぞれのアタッチメント対象に求める機能の特徴として, パートナーには安全基地, 安全の避難所, 近接性の維持, 分離不安という4つのアタッチメント機能すべてを求めるのに対し, 家族には安全基地機能のみ求める傾向にあった。ライフイベントによる影響については, イベント, 年齢, 配偶者の有無といった個々の要因よりも, いくつかの要因が組み合わせられていた。たとえば, 最も重要なアタッチメント対象について, 若い世代でパートナーがいない場合は友人であり, 年配で子どもがいない世代にとっては, きょうだいであった。Allen & Tan (2016) の知見も踏まえると, 友人に対しては分離不安や近接性の維持は求めない傾向にある。

他方, ポリトロピーの視点に基づく研究はまだ少なく, 一般的な測定方法も定まっていない。代表的な測定方法としては, 半構造化面接を用いた Antonucci

(1986)によるコンボイ・モデル (Figure 2) がある。コンボイとは、護衛艦を意味し、生きる上でのサポート・ネットワークを自ら構築していく。コンボイでは、最も内側の第一円：かけがえのない人、第二円：第一円程ではないが大切なひと、第三円：第一、第二どちらにも属さないけれど大切な人を記入してもらう。なお、対象の数に制限はない。

ポリトロピーの視点では、Levitt (2005) がコンボイ・モデルを用いて、児童期から青年期のネットワークについての移行調査を行っている。発達的に見ると、児童中期にネットワーク・メンバーの人数が増え、祖父母世代からのサポートも増加した。青年期には友人のサポートが増えることを示した。メンバーとして挙げられる対象は、母親が最も多く、次いで父親、きょうだい、祖父母、親戚、友人であった。児童期から青年期の移行にかけて、家族を挙げる割合が変わらないものの、友人を挙げる割合が増えている。さらに、サポートを受ける対象と適応との関連も検討した結果、サポートを誰から得ているかではなく、多数のサポート源を持っている子どもがより適応していたことが明らかとなった。

Doherty & Feeney (2004), Levitt (2005) とともに、最も適したアタッチメント対象の属性があるわけではなく、個人によってマッチする相手が変わるということを示している。しかし、母親、パートナーが概して最もサポート的な対象として挙げられる傾向が認められる。対象の属性よりもサポートの量が適応に関連す

るとの Levitt (2005) の知見は、ポリトロピーの特徴をよく表している。一方で、Doherty & Feeney (2004) でほとんどの人が一人のアタッチメント対象のみ挙げていたことは、ポリトロピーとは対立する知見であり、議論の余地が残る。

日本における研究動向

我が国において、アタッチメント・ネットワークの検討を行ったものは少なく、CiNii に登録される査読付き論文は、わずか3編であった。またその対象は、児童期であり、成人を対象とした研究は見受けられなかった。

その中で、モノトロピーに基づくアタッチメント・ネットワークを扱った研究として、村上・櫻井 (2014) が挙げられる。小学4-6年生を対象に、アタッチメント・ネットワークの成員を明らかにすることと、その成員がどの程度アタッチメント機能を果たしているかを検討した。その結果、アタッチメント対象として挙げられるのは母親だけに留まらず、父親、友人、きょうだいなど多様であったことと、アタッチメント機能を果たしているのは第2対象までであったことが示された。また、学年が上がるにつれ、母親を第1対象として挙げる割合が減る代わりに、友人を第1対象とする割合が増えていた。

一方、ポリトロピーであるソーシャル・ネットワーク理論に基づく研究 (柴田・高橋, 2015) では、同じく児童期を対象とした、子どものソーシャル・ネット

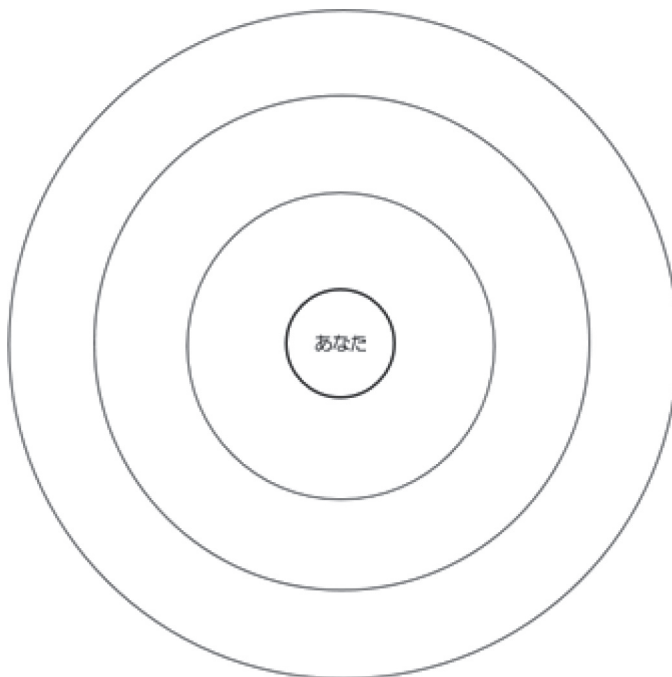


Figure 2 コンボイ・モデル (Antonucci, 1986)。

ワークの内容について母子に尋ね、報告にズレが生じるかを検討した。その結果、母親が思うほどには子どもは母親を第一対象としてとらえておらず、母子の認識は一致しなかった。また村上・櫻井（2014）との共通点として、小学生において母親以外（父親、友人など）もアタッチメント対象として機能していること、年齢を重ねるにつれ母親をアタッチメントの第一対象として報告する者が減少することが挙げられた。

2つの研究から結論付けられるものではないが、母子の認識が一致していない場合、母子のアタッチメント・スタイルが不一致であるために、子どもはよりアタッチメント機能を果たす母親以外の重要他者との関係を築くこと、また、母親との関係がうまくいかなくても、他の重要他者によってアタッチメント欲求が充足されている可能性が考えられる。新たなアタッチメント対象の獲得という観点からみると、児童中・後期はアタッチメント対象が親からなまへ徐々に移行していく時期でもある（Allen & Tan, 2016）。我が国においても、なかまがアタッチメント対象となりうることが示されたと考えられる。

現時点で日本における複数のアタッチメント対象やアタッチメント・ネットワークを扱った研究が少ない理由として、適した測度が少ないこと、ネットワークを想定した視点が浸透していないことが考えられる。

日本における測定ツールは、現在のところソーシャル・ネットワーク理論に依拠する高橋によるもののみである。高橋（2010）は、ソーシャル・ネットワークの中でも特に、「重要な他者と情動的な交渉をしたという要求を充足させる人間関係」を愛情のネットワークと呼び、子ども、大人それぞれを対象とした測定ツールを開発した。子どもの愛情のネットワークの測定には、絵を見て質問に答え、誰にどの程度愛情の要求があるかを測る「絵画愛情関係テスト（Picture Affective Relationships Test: PART: 井上・高橋, 2000）」が作成されている。他方、大人の測定では自己報告式の質問紙である、「愛情の関係スケール（Affective Relationships Scale: ARS: Takahashi & Sakamoto, 2000）」が作成されている。

モノトロピーの視点では、ここ23年で日本版の測定ツールの開発がなされた。アタッチメント研究においてスタンダードである自己報告式の質問紙、Experience in Close Relationship (ECR: Brennan, Crank, & Shaver, 1998)を補完した尺度である、Experience in Close Relationships Relationship-Structure (ECR-RS: Fraley, Helterman, Vicary, & Brumbaugh, 2011)の邦訳版（古村・村上・戸田, 2016）が作成された。ECR-RSでは、どの対象にどのアタッチメント・スタイルを適用しているかという、アタッチメントの個人内分散を測定することができる。さらに日本版ECR-RSや児童版ECR (Brenning, Soenens, Braet, & Bosmans,

2011)をもとに、日本における児童版ECR-RSの作成（中尾・村上・数井, 2019）がなされた。これらの尺度は、関係特異的なアタッチメント・スタイルを測定することを想定しており、またその対象も母親、父親、友人、恋人などを挙げている。

モノトロピー、ポリトロピー双方ともに、測定ツールの開発がなされたことから、日本においてもアタッチメント・ネットワークの検討が進んでいくと考えられる。

アタッチメント・ネットワークを検討する現代的意義

アタッチメント・ネットワークをとらえる2つの視点を紹介してきた。これまでの先行研究を踏まえて、現代におけるアタッチメント・ネットワークの意義を述べる。

幼少期からの一貫したかわりが安定したアタッチメントを形成すると考えるのがBowlbyらによるモノトロピーの視点であることは既に述べたが、不安定なアタッチメントが形成されるリスク因子についても知見が積み上がってきている。たとえば、Riggs & Gottlieb (2009)は、マルトリートメントや家族の機能不全、養育者の職場復帰に伴う主な養育者の交代、生活水準の低下、家族の死、ソーシャル・サポートの不足など、養育態度以外の様々な環境要因が不安定なアタッチメントを形成するリスク因子であることを明らかにしている。こうしたリスク因子は、一見すると家庭の問題であるように見受けられるが、少子高齢化等に伴う社会情勢、経済状況の変化などマクロの環境からも影響を受けていることを押さえておきたい。

社会の変化も踏まえて改めてアタッチメントをとらえると、アタッチメント・ネットワークについて近年注目されるようになってきたのには、社会変化により個人のニーズの変化や、隠れていたニーズが明らかになったとも考えられる。核家族化や共働きの増加に伴い、家族形態はここ30年で変化した（高塩, 2006）。そのため、これまでの伝統的な家族のあり方を前提とした視点では対応しきれないことも多く、実際のニーズと社会的支援が乖離していることもある（高橋, 2015）。そして、諸外国に比べて日本は、子育てにおける社会的資源やソーシャル・サポートの少なさが指摘されている（Pasada & Trumbell, 2017）。

社会的資源の活用とアタッチメントの関連を考えると、乳児期から保育所に子どもを預ける家庭や、祖父母世代の協力のもと子育てを行う家庭もあり、乳幼児期の養育の担い手は母親に限らないこともある（Howes & Spieker, 2016）。小学校においても、保護者が学校に求めるニーズは変化しており、また学校も授業だけでなく、心理社会面の支援も期待されている（文部科学省, 2015）。さらには、家庭と保育所・幼稚園・学校が連携し、地域ぐるみでの子育ても期待され

る。遠藤 (2016) は、家庭と保育所が有機的に連携していることがより望ましいことを踏まえた上で、双方が独立に機能する場合があることも指摘している。家庭で不足している親子関係を、保育者との関係性の中で補う潜在力があり、とりわけ家庭環境に恵まれない子どもにとっては、家庭外の養育者のかかわりが心身の健康を促し、後の社会適応の鍵となる可能性がある」と述べる。

乳幼児期から複数の養育者がかかわることについて、IWMの観点からみると、母親や父親、保育士などが異なるかかわり方をする可能性もあり、異なる養育者との間で異なるアタッチメント・パターンを身につけることが考えられる。また、アタッチメント・パターンの個人差は、その養育者との関係を生き抜くための適応戦略であることも指摘されている (Srouf, Egland, Carlson & Collins, 2005)。これを踏まえ、相手によってアタッチメント・パターンが変わる／変えるということも、社会を生き抜く上での適応戦略ではないかと推察される。そのために、個人が持つ一般的な表象としてのアタッチメント・パターンと、特定の他者に対するパターンに矛盾が生じることもありうるという。

また近年の重要な問題としては、虐待の増加が挙げられる。それに伴い、施設への入所や里親養育も増えており、主な養育者が実親でないこともある。近年「ブカレスト早期介入プロジェクト (Bucharest Early Intervention Project: BEIP; Nelson, Fox & Zeanah, 2014)」の報告により、心理社会的な体験の剥奪が、幼児の脳と行動の発達に及ぼす影響の重大さが改めて浮き彫りになった。BEIPでは、内紛に伴って遺棄され、施設で暮らす子どもを施設養育群と里親養育群に分けて介入を行った。縦断研究による比較を行ったところ、里親養育群の方が、社会性、情動、認知の伸びが高かったことが報告された。里親養育家庭で育ったことで、社会的なふれあいの充足が子どもの発達に肝要であることを示唆している。しかしながら、施設職員が十分な訓練を受けておらず、そのため子どもたちがネグレクト状態にあった (Nelson et al., 2014) ことは考慮すべき点であり、施設養育よりも里親養育の方が良いと結論づけるものではない。

このことから、実親との関係に限らず、それに代わる養育者との間で情緒的な交流が行われれば、社会発達の基盤が整うといえる。

今後の課題と展望

本稿では、複数のアタッチメント対象やアタッチメント・ネットワークに関する研究を概観しながら、これらをとらえるモノトロピーとポリトロピーの視点を比較してきた。いずれの立場においても、児童中期以降、アタッチメント対象が養育者から友人や恋人など

なかま関係に波及していること、またサポートを受ける属性は個人により異なること、しかしながら、母親や恋人がその対象に選ばれる傾向にあることが明らかになった。また、日本におけるアタッチメント・ネットワーク研究の少なさも着目すべきポイントである。アタッチメントは環境に影響されることが多いことから、文化差を考慮して我が国における知見を増やしていくことが課題であると考えられ、また今後の研究が望まれる。

また本稿では、複数のアタッチメント対象やアタッチメント・ネットワークにまつわる理論や実証研究を中心にレビューを行ってきた。しかし、臨床への応用を鑑みると、基礎的研究を積み上げるとともに、臨床現場での実践研究が期待される。心理臨床家はクライアントにとってのアタッチメント対象となる可能性も孕んでおり、そしてまた、関係性そのものが治療促進的であることは、どの流派においても共通であると考えられる。また近年、加速化体験力動療法 (Accelerated Experiential Dynamic Psychotherapy: AEDP; Fosh, 2000) など、アタッチメント理論を援用した心理療法も存在する。発達支援の領域では、「安心感の輪プログラム (Circle of Security Program: COS プログラム)」など、早期のアタッチメント改善介入プログラムも複数ある (北川, 2017)。さらには心理療法だけでなく、今後臨床領域において他職種との連携が期待される。単に異なる専門性を生かすだけでなく、アタッチメントの視点を持ってクライアントにかかわることが、チーム支援においても有益であると考えられる。したがって、臨床領域での知見を積み上げること、一対一の関係に留まらず、複数の重要他者とのアタッチメント関係についても検討することを指針に、アタッチメント研究の今後の展望とする。

引用文献

- Ainsworth, M.D.S., Blehner, M.C., Walter, E. & Wall, S.N. (1978). *Patterns of Attachment*. New York: Routledge.
- Allen, J.P. & Hauser, S.T. (1996). Autonomy and relatedness in adolescent-family interactions as predictors of young adults' states of mind regarding attachment. *Development and Psychology*, **8**, pp.793-809.
- Allen, J.P. & Tan, J.S. (2016). The multiple facts of attachment in adolescence. In Cassidy, J. & Shaver, P.R. (eds). *Handbook of Attachment: Theory, research, and clinical applications*. 3rd ed. New York: Guilford Press. pp.399-415.
- Antonucci, T.C. (1986). Hierarchical mapping technique. *Generations: Journal of the American Society on Aging*, **10**, 10-12.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and Loss*, Vol.1. New

- York: Basic Books.
- Bowlby, J. (1979). *The making and breaking of affectional bonds*. Routledge Kegan & Paul. (作田 勉 (訳) (1981). ポウルビー 母子関係入門 星和書店)
- Brennan, K.A., Clark, C.L. & Shaver, P.R. (1998). Self-report measurement of adult attachment: An integrative overview. In Simpson, J.A. & Rholes, W.S. (eds). *Attachment theory and close relationships*. New York: The Guilford Press. 46-76.
- Brenning, K., Soenens, B., Braet, C. & Bosmans, G. (2011). An adaptation of the Experiences in Close Relationships Scale-Revised for use with children and adolescents. *Journal of Social and Personal Relationships*, **28**, 1048-1072.
- Buist, K.L., Dekovic, M., Meeus, W.H. & van Aken, M.A.G. (2004). Attachment in adolescence: A social relations model analysis. *Journal of Adolescent Research*, **19**, 826-850.
- Collins & Read (1994). Cognitive representations of attachment: The structure and function of working models. In Bartholomew, K. & Perlman, D. (eds). *Advances in Personal Relationships, Vol. 5. Attachment Processes in adulthood* pp.53-90. London: Jessica Kingsley Publishers.
- Crowell, J.A., Fraley, R.C. & Roisman, G.I. (2016). Measurement of individual differences in adult attachment. In Cassidy, J. & Shaver, P.R. (eds). *Handbook of Attachment: Theory, research, and clinical applications. 3rd ed.* New York: Guilford Press. pp.598-635.
- Doherty, N.A. & Feeney, J.A. (2004). The composition of attachment networks throughout the adult years. *Personal Relationships*, **11**, 469-488.
- 遠藤 利彦 (2005). アタッチメント理論の基本的枠組み 数井 みゆき・遠藤 利彦 (編著) アタッチメント：生涯にわたる絆 ミネルヴァ書房
- 遠藤 利彦 (2016). 子どもの社会性発達と子育て 秋田 喜代美 (監修) 山邊 昭則・多賀原 太郎 (編著) あらゆる学問は保育につながる：発達保育実践政策学の挑戦 東京大学出版会
- Fosha, D. (2000). *The transforming power of affect: A model for accelerated change*. United States: Basic Books. (岩壁 茂・花川 ゆう子・福島 哲夫・沢宮 容子・妙木 浩之 (監訳) (2017). 人を育む愛着と感情の力：AEDP による感情変容の理論と実践 福村出版.)
- Fraley, R.C., Helferman, M.E., Vicary, A.M. & Brumbaugh, C.C. (2011). The Experiences in Close Relationships-Relationship Structures Questionnaire: A method for assessing attachment orientations across relationships. *Psychological Assessment*, **23**, 615-625.
- Howes, C. & Spieker, S. (2016). Attachment relationships in the context of multiple caregivers. In Cassidy, J. & Shaver, P.R. (eds). *Handbook of Attachment: Theory, research, and clinical applications. 3rd ed.* New York: Guilford Press. pp.314-329.
- 井上 まり子・高橋 恵子 (2000). 小学生の対人関係の類型と適応：絵画愛情関係テスト (PART) による検討 教育心理学研究, **48**, 75-84.
- 数井 みゆき・遠藤 利彦 (編著) (2005) アタッチメント：生涯にわたる絆 ミネルヴァ書房
- Klohnen, E.C., Weller, J.A., Luo, S. & Choe, M. (2005). Organization and predictive power of general and relationship-specific attachment models: One for all, and all for one? *Personality and Social Psychology Bulletin*, **23**, 363-377.
- 北川 恵 (2017). アタッチメントに基づく親子関係の理解と支援：COS プログラムと「安心感の輪」子育てプログラムに置けるアセスメントと実践 北川 恵・工藤 晋平 (編著) アタッチメントに基づく評価と支援 誠信書房.
- 古村 健太郎・村上 達也・戸田 弘二 (2016). アダルト・アタッチメント・スタイル尺度 (ECR-RS) 日本語版の妥当性評価 心理学研究, **3**, 303-313.
- Levitt, M.J. (2005). Social relations in childhood and adolescence: The convoy model perspective. *Human Development*, **48**, 28-47.
- Lewis, M. & Takahashi, K. (2005). Beyond the dyad, *Human Development*, **48**. (マイケル ルイス・高橋 恵子 (編) 高橋 恵子 (監訳) 愛着からソーシャル・ネットワークへ：発達心理学の新展開 新曜社.)
- 文部科学省 (2015). 初等中等教育分野における KPI 及び工程表について 内閣府 第3回非社会保障ワーキング・グループ. <https://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/kaigi/special/reform/wg2/271002/agenda.html> (2019年6月8日閲覧)
- 村上 達也・櫻井 茂男 (2014). 児童期中・後期におけるアタッチメント・ネットワークを構成する成員の検討：児童用アタッチメント機能尺度を作成して 教育心理学研究, **62**, 24-37
- Music, G. (2011). *Nurturing Natures: Attachment and Children's Emotional, Sociocultural and Brain Development*. Psychology Press. (鶴飼 奈津子 (監訳) (2016). 子どものこころの発達を支えるもの：アタッチメントと神経科学, そして精神分析の会うところ 誠信書房)
- 中尾 達馬 (2017). 児童期から成人期のアタッチメント 北川 恵・工藤 晋平 (編) アタッチメントに基づく評価と支援 誠信書房.
- 中尾 達馬・村上 達也・数井 みゆき (2019). 児童期においてアタッチメント不安とアタッチメント回避を測定する試み：児童版 ECR-RS の日本語版作成 パーソナリティ研究, **27**, 179-189.
- Nelson, C.A., Fox, N.A., & Zeanah, C.H. (2014). *Romania's Abandoned Children: Deprivation, Brain Development, and the Struggle for Recovery*. Harvard University Press.
- Pasada, G. & Trumbell, J.M. (2017). Universality and cultural specificity in child-mother attachment relationships. In Gojman-de-Millan, S., Herreman, C. & Sroufe, L.A. (eds). *Attachment across Clinical and Cultural Perspectives*. London & New York: Routledge.
- Riggs, S.A. & Gottlieb, M.C. (2009). The attachment

- network in family law matters: A developmental-contextual approach. *Journal of Forensic Psychology Practice*, **9**, 208-236.
- Rosenthal, N.L. & Kobak, R. (2010). Assessing Adolescents' attachment hierarchies: Differences across developmental periods and associations with individual adaptation. *Journal of Research on Adolescence*, **20**, 678-706.
- 柴田 玲子・高橋 恵子 (2015). 小学生の人間関係についての母子報告のズレ 教育心理学研究, **63**, 37-47.
- Stroufe, L.A., Egland, B., Carlson, E.A. & Collins, W.A. (2005). *The development of the person*. New York: The Guilford Press.
- Takahashi, K. & Sakamoto, A. (2000). Assessing social relationships in adolescents and adults: constructing and validating the Affective Relationships Scale. *Journal of Behavioral Development*, **24**, 451-463.
- 高橋 恵子 (2010). 人間関係の心理学：愛情のネットワークの生涯発達 東京大学出版会
- 高橋 恵子 (2015). 家族についての素朴信念からの解放のために：発達心理学からの提案 日本家庭科教育学会誌, **58**, 3-15.
- 高塩 純子 (2006). 国勢調査結果にみる家族類型の変化 総務省統計局 <https://www.stat.go.jp/info/ronbun/index.html> (2019年6月7日閲覧)
- Trink & Bartholomew (1997). Hierarchies of Attachment Relationships in Young Adulthood, *Journal of Social and Personal Relationships*, **14**, 579-601.